
とあるバカと軽音対決?

佐井村伊佐太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるバカと軽音対決？

【Nコード】

N0389N

【作者名】

佐井村伊佐太郎

【あらすじ】

「楽に頭を良くしたい」

そんな願いを持つ軽音部の少女が、観察処分者のバカが…

ガールズバンドのライブに出る時、学園都市のリアルナンバー200001が舞い降りる。

「優勝バンドには、頭が良くなる学習装置をあげるって、ミサカはミサカはライブを主催してみたり！」

果たして優勝するのは誰なのか…

1・唯の願望（前書き）

上手く合わせられればと思います。
読んでみて下さいm（―）（―）m

1・唯の願望

ある日の夜、平沢家にて。

「もうやだよ」

平沢唯はソファでうなだれていた。

「どうしたの？お姉ちゃん」

「あつ憂い。大変だよ、大変なんだよ」

憂は座布団に座り、問いかける。

「何があつたの？」

「それがさ憂。再来週には何があると思う…」

憂は首を傾げながら、

「えっと、期末テストの事？」

憂は記憶を探りながら答える。

「そう！そうだよそれ！ホントビックリだね」

「お姉ちゃん、それ年間行事予定表にも書いてあるよ」

ええー！唯はクッションに顔をうずめながら、足をバタバタさせる。

「楽に頭良くならないかな」

「ちゃんと勉強しようね、お姉ちゃん」

憂はしっかりした妹だ。

1・唯の願望（後書き）

今回はプロローグ的な要素を組み込んだ、けいおん？サイドの物語です。

今回はバカとテストと召喚獣サイドを書く予定です。

読んで下さった方がいたら、泣いて喜びます！

次回もよければお読み下さいm（――）m

2・明久の野望（前書き）

今度はバカとテストと召喚獣サイドです。

2・明久の野望

雄二いゝ、と息を切らせながら吉井明久はFクラスの教室に入ってくる。

綿の少ない座布団を枕代わりにして寝ていた、坂本雄二は明久の声で体を起こす。

「おお明久、今日は朝から元気だな。朝食でも食って来たか？」

「おはよう雄二。そうそう、今日は朝からカップ麺二分の一！自分でも思い切ったと思ってるよ…ってそうじゃなくい」

明久の大声に、いつものメンバーが集まり始める。

「どうしたのじゃ？明久よ」

「…何かあったか？」

美少女？の木下秀吉と土屋康太、通称ムツツリー二だ。

「ちょうどいいや、皆も聞いてよ」

そう言う明久は、おもむろに一枚の紙を取り出した。

「なんだ明久。それは」

「ふふっ雄二、これで僕達はAクラスに勝てるかも知れないよ…」

自信あり気な明久の言葉に、三人の目の色が変わる。

「それはどういうことなのじゃ！明久」

「…詳しく聞かせて欲しい」

先を急かす二人の前で、明久はもったいぶりながら紙を表にし、ミカン箱に叩きつける。

ミカン箱が潰れる…

しかし明久は、

「僕らがAクラスに勝てば、もう要らなくなる物さ」と自信満々だ。

その紙はチラシだった。

手書きをコピーした様で、手作り感満載だ。

中身を簡単にまとめると、

・来週末に。。。でガールズバンドのライブを開催する。

・参加費は無料で参加バンド募集中

・優勝バンドには頭が良くなる学習装置をプレゼント
といったところだ。しかも、

「学園都市製の学習装置だ」と」

その内外では科学技術に二、三十年の開きがあると言われる学園都市だ。効果は確かだろう。

「どうさこれ」

自慢気に明久が胸を張る。

「朝に見つけたんだ。これで優勝さえすれば…」

「ちよつとストップだ明久」

明久を雄二が止める。

「確かに凄い話だが、おれたちや楽器なんかできないぞ」

確かにそうじゃ、と秀吉とムツツリー二も腕を組む。

しかし明久は諦めない。

「雄二、秀吉、ムツツリー二。皆はこれ位で諦めちゃうの？Aクラスに勝つチャンスなんだよ！頑張ろうよ！」

明久の言葉に三人は黙り込む。

「明久、楽器はどうするんだ？」

雄二が問いかける。

しかし明久は怯まない。

「楽器なら、知り合いから借りるさ」

流石は貧乏、買いはしない。

大丈夫なんだな、と念を押す雄二。

ああ、と自信満々な明久。

秀吉とムツツリー二が歓喜する

だが最後に一つ、と雄二が手を挙げる。

「俺たちのどこがガールズなんだ？」

あ…

吉井明久はバカだった。

うなだれる明久。

しかし雄二は明久の肩に手を載せる。

「まあいい、まずはメンバー探しだな」

そう言つて雄二は立ち上がる。

「なあに、心配するな。あてならある」

そう言つて意味あり気な目で秀吉を見る雄二。

「うっ、今何か寒気が」

「…心配する事はない」

ムツツリー二には分かっているようだ。

こうしてメンバーを探し始めるバカ四人。

果たしてバンドは組めるのか…

2・明久の野望（後書き）

いかがでしたでしょうか？

次回は再びけいおんサイドに、是非お読み下さいm（
—
—
）m

3 ・唯はライブに出たい（前書き）

今回はけいおんサイドです。けいおんサイドは短くなりがちですが、頑張ります！

3・唯はライブに出たい

「で、話してなんだよ」

ここは音楽室。軽音部の部室である。

昼食の時間から、唯に話があると告げられていた、三年生三人は唯に問いかける。

「ふっ、りっちゃん。皆…これを見なされえ！」

そう言つて唯が取り出したのは、一枚のチラシだ。

「何ですか？それ」

この軽音部に唯一の二年生で後輩の、中野梓の声だ。

「チラシだよ。しかも優勝商品付きのライブだよ」

「待て待て」

部長の田井中律がストップをかける。

「唯、日付を見てみるよ」

皆がチラシを見つめる…

「このライブ、来週じゃないか」

「ちよつと厳しいかも」

秋山澪と琴吹紬が日付を見て呟く。

「ええ、何でえ？」

唯は不思議そうに首を傾げる。

「来週だけど、普段から軽音部で練習してるから、大丈夫だよ」

…練習、してますかね？、梓がポツリと呟く。

「してるよ！」

唯は机に手をつき立ち上がる。

しかし今もお茶をしているのだから、唯の言葉にはあまり説得力がない。

「まあそれはともかく」

律が割って入る。

「唯、澪とムギが言ってるのは、練習不足

とかじゃないぞ」

「そうなの？」

唯は目を見開く。

「唯、来週だぞ」

「来週ねえ……」

漑の言葉に腕を組みながら考える。

（来週、来週……）

「お小遣い日だ！」

「関係ないだろ」

律のチョップが決まる。

「唯ちゃん、期末テストの事よ」

「ムギちゃん、期末テストは再来週だよ？」

「お前は勉強せんのか」

漑のツツコミが入る。

「漑ちゃん、勉強しなくてもいいように、ライブに出るんだよ！」

商品を見なされえ、と唯はチラシを指差す。

「頭が良くなる学習装置……学園都市製？」

そうだよあずにゃん、驚く梓に唯が抱きつく。

「つまりライブで優勝して、これさえゲットすればいいんだよ！」

皆が黙り込む……

「正直……私は出てもいいかな」

律が手を挙げる。

流石りっちゃん心の友よ、唯は大喜びだ。

「私も……普段からそこそこ勉強はしてたので、大丈夫です」

「私も出るわ！何だか楽しそうだし」

梓と紬も手を挙げる。

「これで決定だね、漑ちゃん」

唯が手を挙げながら、意地悪く笑って漑に告げる。

ああーもう！、やけくそな声をあげながら、漑も手を挙げた。
こうして桜高軽音部、放課後ティータイムの参加が決まった。

3 ・唯はライブに出たい（後書き）

次回はバカとテストと召喚獣サイドです。バンドのメンバーや担当楽器が決まる予定です。

4・明久はライブに出たくない（前書き）

今回はバカとテストと召喚獣サイドです。

メンバーはどうなるのか、そして題名の意味は…

お読み頂けると、とても嬉しいですm（| |）m

4・明久はライブに出たくない

「話しと言うのは何ですか？」

「変な事企んでたら、目を潰すわよ。アキ」　　？　　？　　？　　？

？話しに優しく耳を傾けるのは、姫路瑞希。ひよんなことからFクラスに入ってしまった、とても頭の良い少女だ。頭が読んでだけでなく、誰にでも優しい為、クラスのアイドル的存在である。

？ただし、彼女の料理には要注意…

？もう一人の少女は島田美波。悪い人ではないのだが…少し凶暴だ。特に、雄二達は四人で来たというのに、明久だけは名指しで脅すなど、明久はよく彼女のターゲットにされる。

「決して怪しい話じゃないさ」

？美波の迫力に、雄二は言い訳口調になる。

？美波はその様子を見て、目を細くし四人を睨みつける。

「ち、違うのじゃ。怪しくなどない。ただおぬしに頼みたいことがあったのじゃ」

？ふーん、秀吉のフォローに美波はとりあえず納得したようだ。

「で、何なんですか？」

？コホン、と咳をし雄二が話し始める。

？それはだな…

「二人にバンドをやってもらいたいんだ」

「「ええー！」」

？美波と瑞希が驚きに声をあげる。

「えゝとね…」

？明久が二人に、ことの顛末を話し始める…

「ようするに、そのライブに出るには、メンバーが女の子じゃないとだめだから、ウチら呼ばれたわけね」

「そうなんだ。頼むよ、二人とも」

「明久が手をあわせて頼みこむ。」

「まあ、アキがどうしてもって言うなら…」

「わ、私は構いませんよ」

「ありがとう！姫路さん、美波！」

「涙を流して大袈裟に喜んでる明久の後ろで、その他の男三人は肩を寄せあう。」

「やはり明久を連れて来て正解じゃったな」

「…こつも簡単にいくとは」

「作戦通りだな」

「ひそひそ話をしている男三人に、美波が話しかける。」

「ねえねえ、あんたら。ウチは楽器なんて出来ないわよ」

「わ、私も出来ません…それに、バンドって二人じゃ少なくありませんか？」

「不安気な二人の声、しかし雄二は自信あり気に答える。」

「楽器の事なら大丈夫だ、皆初心者だし、俺とムツツリー二がサポートする」

「雄二はFクラスの代表で、人をまとめたり、引っ張っていくのが上手い。ムツツリー二は器用だから、楽器もそれなりに出来るだろう。」

「何とか行けそう、という雰囲気皆の間に広がりかけた時、瑞希がおずおずと手を挙げる。」

「楽器は頑張ってみますけど、メンバーの方はどうなんですか？」

「さつき、皆初心者って言ってたけど、ウチら以外のメンバーって誰なのよ」

「そつだよ雄二、メンバーって僕も知らないよ。誰なの？」

「わしも知らぬのお」

「その中で、雄二とムツツリー二だけは平然としている。何か話をあわせていたのだろうか…」

「雄二とムツツリー二の目が合う。頷きながら二人が立ち上がる…」

「えー、聞いてくれ。メンバーは四人だ」

「一言一言に皆がざわめく。」

「…その内二人は知つての通り」

「美波と瑞希…後の二人は…」

「後の二人は、」

「後の二人は、秀吉と明久だ」

「「ちよつと待^{てえ}（つのじゃ）」」

「二人が雄二とムツツリー二に詰め寄る。」

「どうしたんだ、二人とも」

「どうしたじゃないよ雄二！何で僕が女の子三人に囲まれてバンドしなきゃいけないのさ！」

「明久！おぬしの言葉もおかしいのじゃが…まずは雄二、おぬしじゃ！わしらは男じゃぞ！」

「目を血走らせる二人、体する雄二は…」

「女じゃなかったのか？」

「「雄二？」」

「本気で襲い掛かろうとする二人。」

「悪い悪い、冗談だ。許してくれ」

「雄二がかかるく謝る。」

「ホントに冗談がキツイよ、雄二は」

「そうじゃ、そうじゃ。わしらがガールズバンドとはの…」

「はっ？そっちは本当だぞ」

「目を白黒させる二人。固まってしまった…」

「美波と瑞希に向けムツツリー二が話す。」

「…詳しい事はまた後で、俺は二人を人間にしてくる」

「？そつ言い残し、ムツツリー二は石像と化した明久と秀吉のもとへ向かう。」

「何はともあれ、メンバーが決まって良かったな。明久！」

「雄二が力強く明久の肩を叩く。」

「二人は固まったままだ…」

「雄二の豪快な笑い声だけが、しばらくその場に響いていた。」

?

4・明久はライブに出たくない（後書き）

どうだったでしょうか…コメントを頂けると大喜びです！…でも
ちよっとコワイな（笑）

次回も是非お読みくださいm（ ）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0389n/>

とあるバカと軽音対決？

2010年10月10日15時00分発行